

美人皮膚科医の先生 に、軟膏をおちんちんに 塗ってもらいました。

僕は都内に通う大学1年生です。普段はサークル活動したり、バイトをしたりと、ごく普通の大学生活を送っています。でも、心の奥底には誰にも言えない強い秘密の嗜好があります。

それは、自分のおちんちんを女性に見られることに、言葉にできないほどの性的興奮を覚えるというものです。

子どもの頃から女の子に事故を装っておちんちん見せつけたり、トイレの清掃にお姉さんが入ってきたらわざと便

器と距離を離れてちんちんを出したりと、見られることに快感を覚えていました。

そんなある日、近所に新しい皮膚科がオープンしたという情報を耳にしました。院長は高橋麗華先生という女医で、28歳という若さながら、実績も豊富で優秀だと評判が高いらしいです。駅のホームに大きく掲げられた看板には、先生の笑顔のポートレート写真が印刷されていました。黒髪を肩まで優しく流した清楚で知的な雰囲気、大きな瞳が印象的で、白衣がとてもよく似合う上品な佇まい。私はその写真を見た瞬間に、心臓が激しく高鳴るのを感じ、胸の奥が熱くなりました。

「この先生に、自分のちんちんを直接、間近でじっくり見せたい」

その衝動は抑えきれないほど強くなりました。病院での診察であれば完全に合法ですし、先生はプロとして冷静に対応してくれるはずです。僕は何度も迷った末に、勇気を出して初めての診察予約を入れました。

予約当日、僕は大学の帰りにクリニックへ向かいました。待合室は明るく清潔で、柔らかい照明と穏やかなBGMが流れていました。15分ほど待ったあと、名前を呼ばれ、診察室のドアを開けました。

そこに、高橋麗華先生がいらっしゃいました。白衣姿の先生は看板の写真以上に美しく、スラリとしたスタイルに、女性らしい柔らかな曲線が白衣の下に優しく浮かんでいます。淡いピンクのブラウスが胸元を包み、首元が少し覗

いていて上品です。柔らかい笑顔で僕を迎え入れ、椅子に座るよう促しました。その笑顔を見ただけで、すでに息が少し乱れそうになりました。

「今日はどうされましたか？」

僕は声を少し震わせながら言いました。

「最近、股の部分がとても痒くて困っています。特にその、、、陰茎の皮膚や包皮のあたりが、夜になると耐え難いほど痒くなり、眠れない日が続いています。掻いてしまうと余計に悪化するような気がして……」

麗華先生は表情を変えず、うなずきながらPC上のカルテに入力をします。穏やかな目で私を見つめ、静かに続けます。

「わかりました。では、実際に診察させていただきますね。診察ベッドに横になって、衣服を下ろして患部を見せてください。」